

第2章 1995年大統領・国会議員選挙

著者	遅野井 茂雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジ研トピックリポート[緊急レポート]
シリーズ番号	11
雑誌名	フジ・ショック：二期目のフジモリ政権と日本の課 題
ページ	9-12
発行年	1995
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00028576

第2章 1995年大統領・ 国会議員選挙

1. 歴史的な勝利

(1) 選挙の意義と選挙戦

今回の選挙の意義は二点に絞られよう。まず、92年4月5日の「自主クーデター」後の民主化過程のゴールというべき選挙と位置づけられる。とくに、その選挙に全ての政党が参加したという点が重要である。国際的な民主化圧力をうけて92年11月行なわれた民主制憲議会(CCD)選挙には、アプラ党(PAP)や人民行動党(AP)、統一左翼連合(IU)など主要政党が参加しなかったことを考慮すれば、政治的正常化のさらなる実現を意味している。

次に連続再選、一院制の議会という93年新憲法のもとでの政治改革にのっとった大統領選挙、議会選挙であったという側面をもつ。もとよりフジモリ政権にとっては、憲法を改正し連続再選を目指そうとした改革の重要な通過点であり、非常措置導入を含む政権全体の信任を問う性格を帯びるものである。

選挙戦は、平和な環境の到来、インフレの抑制、力強い経済回復、高支持の維持という条件を背景に、再選を目指すフジモリ大統領の優勢のうちに終始展開された。実質、UPP（ペルーのための団結）の旗を掲げた有力対立候補、ペレス・デクエヤル前国連事務総長との戦いとなったが、市場経済重視の経済政策が同じであるだけに、対立軸は社会政策、地方分権、制度強化、民主主義、軍との関係に及んだものの、争点は明確にならず盛り上がりには欠けるものであった。

むしろ、デクエヤル候補の各勢力との協調的で融和な姿勢は、老齢という条件と相まって、決断力に欠ける指導者というイメージを強めたことは否めない。とくに議会議員リストに労働総同盟(CGTP)の代表から保守系の軍人までを動員したことは、有権者に不安を与える結果となった。また国際社会の中樞を歩んできた白人エリートとしてのスタイルは、日系人大統領とは対照的に、インディオ農

民や都市の混血民衆層とコミュニケーションを図ることを困難とし、デクエヤル候補の支持率は伸び悩んだ。世論調査でもフジモリ候補との間に、常時20～25ポイントの差が生じていた。

さらに第三の候補として11月頃から頭角を現し、「チノの次はチョロ」をスローガンに民衆の支持を集めようとした混血(チョロ)の独立派エコノミスト、アレハンドロ・トレド(CODE-Pais Possible)も、その後低迷し、台風の目とはならなかった。

(2) 「ツナミ現象」の再現

新憲法では、有効投票に無効票・白票を含めずと改正されており、フジモリ候補が優勢な選挙戦を背景に、過半数を得て決戦投票を待たずに再選されるか否かに焦点が集まったが、結果は64%といずれの事前の調査予測をも超える歴史的な勝利であった。「堅い北部」と呼ばれたアプラ党の地盤リベルタ県など、北部諸県を含む全県で過半数を突破しての大勝である。直前に集計用紙の大量紛失という事件が発生し選挙の実施が危ぶまれたが、選挙自体は、監視にあたった民間団体(Transparencia)や米州機構(OAS)も判断したように、概ね正常に実施され、デクエヤル候補など他の陣営も認めざるを得ない文句無しの勝利であった。

有権者の多くは、インフレの抑制とテロの克服という、5年前の状況からすれば奇跡に近い実績と変化を前に、保守化傾向を示し、政権の継続を選択したといえる。ペルーの融和を訴え、民主主義と社会政策の重要性を説くデクエヤル候補に同調できたとしても、あえて指導者を交替し不確定さをともなう変化に賭ることはしなかった。国民にとっては、暴力と不況による長く深刻な危機とその後の厳しい調整を耐えぬいた末に、やっと感じられる安定と発展への手ごたえであり、それを、変化によって無に帰したくないとする反応であり、今後に期待感を込めた意思表示であったと解釈することもできよう。94年を分水嶺にペルーの経済社会情勢は大きく転換し、国民の心理状況に大きな変化が生じたことを物語っている。

だが高得票率は選挙前のあらゆる予測を超えるもので、大統領自身も驚くほどの、90年選挙時の「ツナミ現象」の再現といえた。その主たる原因は、フジモリに代わり得る信頼に足る指導者不在という状況下で、成功をおさめた現職の強みという要因であったであろう。20～30歳代が大多数を占める有権者の記憶のなかで、フジモリ政権はやるべきことをやり、成功をおさめた初めての政権であった。

表 2 - 1 1995年大統領選挙 結果

候補者 (政党)	得票数	%
アルベルト・フジモリ(C90/NM)	4,798,515	64.42
ベレス・デクエヤル(UPP)	1,624,566	21.81
メルセデス・カバニヤス(PAP)	306,108	4.11
アレハンドロ・トレド(CODE)*	241,598	3.24
リカルド・ベルモン(MCN/Obras)	192,261	2.58
ディエス・カンセコ(AP)	122,383	1.64
エセキエル・アタクアシ(FREPAP)	57,556	0.77
アウグスティン・アヤ(IU)	42,686	0.57
その他	62,713	0.86
白票	830,489	100.00
無効票	786,742	
投票総数	9,065,617	

* CODE-Pais Possible (出所) JNE 4月25日

そして93年の国民投票における地方での敗北の教訓に学んだ現職大統領が、学校建設や公共事業、国家補償社会開発基金(FONCODES)を通じた社会政策を、着実に地方に浸透せしめた結果ということに他ならないであろう。

他方デクエヤル陣営は、200万人の雇用創出といった80年代を想起させるような根柢の薄いポピュリスト的と映る公約を掲げ、また投票日直前に日系人批判など程度の低い必死のフジモリ攻撃を行った。さらに投票日前日にワヌコで不正らしき事件が表沙汰になった際、フジモリ圧倒的優勢の情勢下で反フジモリ陣営が選挙実施の延期をそろって要求したことが、態度を決めかねていた有権者の心理に影響を及ぼしたものと考えられる。

有権者の多くは、インフレとテロがおさまリ、ようやく生活に落ち着きを取り戻し、将来を展望できるようになった環境下で、無益な政争や対立を好まないばかりか、選挙延期を求めるアクションを反フジモリ陣営の策略とみて反発したのであろう。国民の多くの関心は、個人的な経済生活の改善という徹底した個人主義的プラグマティズムに立脚するものであり、テロが収束し、エクアドルとの戦争にも一応の終止符が打たれたいま、これ以上の無益な政争を望むものではなかった。

2. 無党派の優位と政党制の崩壊

他方、今回の選挙では、1990年にも増して、既成政党に対する国民の不信感が徹底して表明された。大統領選挙でアプラ党は4%、人民行動党も1.6%と、既成政党はいずれも結党以来最大の惨敗を喫したのである。顧みれば、90年選挙で無名の無党派候補者を大統領にかつぎ上げた「フジモリ現象」は、政党政治の深刻な危機の表れであった。それを境にペルーの政党制は著しい流動化を呈したわけであるが、その後「自主クーデター」を経た改革で危機は加速された。今回の結果からみれば、30年のアプラ党結成に始まり、50年代半ばを経て形成されたペルーの政党制は崩壊したと結論づけることもできる。

議会選挙では、選管の指示の不徹底から各投票所の集計の段階でミスが発生し大量の無効票が発生する不手際があり、それが議会選挙の正当性を若干低めたことは否めないが、国会議員選挙も「ツナミ現象」の影響で、与党連合は過半数を突破し、120議席中67議席を獲得した。アプラ党8、人民行動党4、キリスト教人民党(PPC)3、統一左翼連合(IU)2と、既成諸政党は17議席を獲得したにすぎず、残りは、2位で17議席を得たデクエアル陣営の「ペルーの団結」(UPP)を含め、いずれも個人を中心とした無党派運動で占められたのである。

表2-2 1995年議会議員選挙 結果 (出所：JNE 4月25日)

政党	得票数	%	議席数
与党連合(C90/NM)	2,277,423	52.10	67
UPP	611,804	14.00	17
PAP	285,526	6.53	8
FIN	213,777	4.89	6
CODE-Pais Posible	181,397	4.15	5
AP	146,018	3.34	4
PPC	135,236	3.09	3
Renovacion	130,060	2.98	3
MCN/Obras	87,252	2.00	2
IU	82,061	1.88	2
その他	220,483	5.04	3
白票	502,774		
無効票	3,356,435		
総計	8,230,246		120